

教 仏 名 聞

第33号

(発行日)

2013年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

お念仏に導かれて ④

(名古屋別院主催の「人生講座」でのお話、前回からの続き)

実際、弥陀の十七願によつて、阿弥陀仏は、如来様ご自身を声となり言葉となり名号となつて、私に聞かそうとされてきているのです。これが第十七願です。

設け我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ。

そして親鸞聖人は、第十七願を重ねて誓われた重誓偈に、

我仏道を成るに至りて名 声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ、と。

衆のために宝蔵を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん。(行巻・引用)

このところに聖人は非常に感銘を受けられたのです。それで、『正信偈』に「重誓

名声聞十方」(重ねて誓うら

くは名 声十方に聞こえんと)と。これは非常に大事な

お心です。阿弥陀様は私に、

「一生懸命念仏を称えてこいよ」と、こういうことではな

くて、私にどこどこまでも名

声(念仏)を聞かせたい。そ

れで重ねて誓っている。

〈名声〉というのは、名となつて声となつてということ

で、南無阿弥陀仏の名となり、名号となつて、十方の衆生に

聞かせたい、聞かせずにはお

かない。阿弥陀仏そのものが、私どもへ名となり、声となつ

て、聞かせたい、こういうお

心です。

南無阿弥陀仏は、私に称え

させるというよりも、称えさ

せることによつて聞かせよう

は、實際念仏しないと具体的

には聞こえてきません。どこ

かのお寺のお説教ではじめて

聞こえてくる、そういうこと

があつても、それはそのとき

限りです。ところが、お念仏

は阿弥陀仏ご自身を私の上に

姿を現し、形を現し、私に出

遇おうとして下さっているの

です。ご自身を、自分で示し

て下さるわけです。称えさせ

て聞かせるということ。

一声一声において、阿弥陀

仏は、私に「南無阿弥陀仏」

とご自身を現し、喚びかけて

下さる。へここにいておるぞ」と。南無阿弥陀仏という

身の名告りは、名となり、声となつて、私の上に現れようとし、はたらかきかけて下さる。そのはたらき

「ひとこえ ひとこえ 如来のお出まし ひとこえ ひとこえ 浄土真宗」と。南無阿弥陀仏は、如来ご自身がお出まし下さった、現れて下さった私の救い主。「ここにおるぞ、助けるぞ」と喚びかけて下さっている。そこに浄土真宗は極まっているじゃないかと…。こういう歌です。

そうしますと、浄土真宗のお念仏は、極まるところは、「聞く念仏」ですね。私のようなものを阿弥陀様がみそなわして下さって、訪ねて下さって、私を求めて下さって、私を探して下さって、私に会いに来て下さる。

そして、本当に仏法も何も無いからっぽの私、煩惱だらけの、もう落ちるしかないような私のところに来て、へそんなお前だから助けてやる、引き受けてやるから心配するな」と大悲のありったけをこめて喚びかけて下さるお言葉が「ひとこえ、ひとこえの南無阿弥陀仏」なのです。ああ、そうであったかと驚く。

称えているお念仏の他に阿弥陀様を求めたり、聞いているお念仏の他に信心を求めてみたりしている。それは余り

にも軽く念仏を受けとつてい
るのです。

そうではなくて、この「ひ
とこえ、ひとこえ」は重い。
如来ご自身の自己表現ですか
ら。親鸞聖人は、南無阿弥陀
仏は「浄土真実の行・選択本
願の行」とこう言われます。
真実の行であり、本願の行な
のだと、こうおっしゃって
います。私の上に広大なまこと
である真実が現れ出て、私に
喚びかけておるような、そう
いうはたらきであり、同時に
選択本願：「必ず汝を撰め取
つて、浄土に生まれさせよう、
必ず助ける」と、こう私に誓
つて下さるところの大悲の行
なのだ。ですから単なる人
間の小さな修行ではないので
すよと。人間が称えてなんと
かするような、人間の修行で
はないのです。阿弥陀様ご自
身が現れてここへ来て下さっ
ているのだという、驚きなの
です。ですから、小さい時か
ら南無阿弥陀仏といつてい
た、その言葉は大変な言葉で
あったと、その重さに気が付
くのです。

そうしますと、「聞其名号
信心歡喜」で、信心が、阿
弥陀様の慈悲が、私のところ
に届くのです。心の底に届く。

これは、不思議ですね。阿弥
陀様のお慈悲が「あーそう
であったか」と「こんな私の
ための阿弥陀様であったか」
ということに気が付くとい
うか、驚きですね。うなずくと
いうような小さなものじゃな
いのです。うなずきは、「わか
りました」といいながら、ま
だ頭で考えていますわ。「え
え！」という、「それほど
広大な大悲でしたか」と、む
しろびつくりする。その阿弥
陀様の慈悲が、流れ込むとい
うか、届いて私の心と離れな
くなりません。なぜそうなるの
かわかりません。仏凡一体、
仏心と凡心が一つになる。そ
れは、御和讃に

真心徹到するひとは

金剛心なりければ

三品の懺悔するひとは

ひとしと宗師はのたまえり

と。(真心徹到)と親鸞聖人
はおっしゃっていますね。真
心というのは、真実まことの
心、阿弥陀様の心。それが徹
到する。(徹到)という言葉
につきまして、聖人は左訓(註
釈)をされて、「髓ニトオ
ル」というおっしゃっている。
(髓)というのは、骨髄とか
いうでしょ。いのちの核でし
よ。中心部分です。私の骨髄

というのは、私のいのちの中
心部分、そこに真心が通って、
徹到してくる。届いて下さる。
そして、私と阿弥陀様は離れ
なくなるのですね。それをへ
撰取不捨)、撰取されると。

私が離れようと思つても、阿
弥陀様はついて離れなくなっ
て、そしてついには浄土へ導
き、浄土へ生まれさせて下さ
る。撰取不捨されると、浄土
に生まれることが決定するわ
けです。それが「至心に回向
したまえり」です。

阿弥陀様と出遇わないと、
出遇つて阿弥陀様のお心が届
かないと、いわゆる撰取され
ないと、浄土に生まれるとい
うことは決定しないのです。

そういうことが、御和讃では

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

で、弥陀の名号を称えている
時に、弥陀の名号称えつつ信
心まことにうるわけです。「弥
陀の名号称えつつ」で、弥陀
の名号を称えつつという中
で、弥陀の名号のお心がはじ
めて届いて、信心まことにう
るのです。

ところが、弥陀の名号を称
えているが、なお弥陀の本願

を信じない。それは、

誓願不思議をうたがいて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたま

う

で、念仏は称えていても、そ
の念仏の本願、弥陀の本願、
誓願不思議を信ぜずに疑っ
て、(称えておればなんとか
なる)と、称えることに力を
いれて、弥陀の本願のお心を
いただいていない場合は、化
土といつて仮の浄土にしか生
まれられないのである。だか
ら、どうかお願いだから、弥
陀の本願を素直に不思議と信
じてほしいというのが、親鸞
聖人のこの歌の思召しです。

そういうことで、弥陀の名

号を聞くとところに、救いが実

現してくるわけでございます。

それで、私自身のことを申
しますと、そういう時にどう
なったかといえますと、ある
時そういうことが起こる。夕
方(三十八歳のある日)でし
たけれども、鹿児島県の離れ
島にいたのです。甌島という
島で、そこに真宗のお寺があ
り、その代務住職をしてい
たのです。夕方に初めてそう
いうことに気が付いて、「あ

ーそうか」と。そして外に出
ましたら、池があるのですけ
れど、その横に柳がはえてい
たのです。それを見たときに、
「あーなんときれいな緑か」
と。それまでは、さきほど申
したようにガラスで覆われた
ようなリアルな感じがしな
ったのです。それが、美しい
ものを美しいと実感できるよ
うになったのです。そして、
心の内外がガラスで隔てられ
いるようない感じ
が取れていました。それから、
お説教といえますか、お話を
するのが非常に楽になりました。

阿弥陀様に出遇つたら、ど
こが変わったのかといえ
一言でいえば、根本気分が
変わったということです。それ
まで、心の底がうっとうしく
て、なんともいえない、そう
いう根本気分が変わったとい
うことです。それが、ずっと
今も続いています。ただそれ
は、この世のご利益です。一
番のご利益は浄土に生まれて
仏様にさせていただくという
ことでしょう。時間がまいり
ましたので、こちら辺で終わ
らせていただきます。

(了)

正信偈に学ぶ同答

(五十四)

行者正受金剛心

慶喜一念相應後

与韋提等獲三忍

即証法性之常樂

〈書き下し〉行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲、すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

〈現代語訳〉「行者は他力の信を回向され、如来の本願にかなうそのときに、韋提希と同じく喜忍・悟忍・信忍の三忍を得て、浄土に往生してただちにさとりを開く」と述べられた。

*

N 「次に、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲」のところをお話下さい

D 「阿弥陀仏が「救い無き汝をこそ助ける」と喚んで下さる本願のお心に気がついて、ああ有難いと喜ぶ心が起こる、それを本願のお心に相應（かなう）した一念の信心が起こるといいますが、その信

心の内容を善導大師は喜忍・悟忍・信忍の三忍と仰せられるのです」

N 「へ韋提と等しく」とは

D 「これは観無量寿経の教説の中で、お釈迦様の説法を聞いた韋提希という、インドのマガタ国の王妃が、阿弥陀仏の大慈悲心にふれて信心を起こす。善導大師は私どもに起こる信心は韋提希夫人に起こった信心と等しい信心だと仰せられるのです」

N 「喜忍・悟忍・信忍とは」

D 「忍とは確認すること。まず喜忍とは阿弥陀仏の救いを喜ぶ心、悟忍とは阿弥陀仏のお心がかかること、信忍とは阿弥陀仏のお心に信順していることで、本願を信じる信心において、喜・悟・信という三つの功德が自分自身に確認されるのです」

N 「もう少し詳しく三忍についてお話し下さい」

D 「まず信心には喜びが伴います。阿弥陀仏の本願は私たちに南無阿弥陀仏となって

〈汝を助ける〉と仰せられています。その仰せがまことと知らされると、そこに当然、人生の行く末に対する安心、現在に阿弥陀様が共にいたもう喜び、私の今の心が阿弥陀仏の大慈悲心によって満たされてくる、などの喜びが与えられます」

N 「では信じたらいつも喜んでいていいのですか」

D 「いつも意識して喜んでいくわけではありません。平生は如来様を忘れていることが殆どだといってもいいでしょう。しかし、心の底に安心という満足があります。たとえば、幼い子どもが公園で友達と遊んでいる。その傍でじつと母親が見守っている。幼児は親が見守っていることが安心して他の子どもと遊んでいる。幼児は親が傍にいないけれども、心の底に親が傍にいてくれていると知っているから安心して遊べるのです。大悲の如来様がこの親のようにいつも傍にいて下さっているけれども、幼児である私はいつも意識しているわけではなく、ちよいちよい思い出す程度。けれども、心の底に〈親がついていて下さっ

ている〉と無意識的に知っているから、安心があり満足があるのです」

N 「いつも喜ぶというわけではないけれども、安心があるのですね」

D 「ええ、そうです」

N 「では、悟忍とは」

D 「これは阿弥陀仏のお心が分かるということです。たとえ阿弥陀仏のお心の分り方が乏しくても、阿弥陀仏のお助けの思し召しがどういふものかが知られている。南無阿弥陀仏が私のまことの救いであり、阿弥陀仏が私とともにいて私を撰め取って下さっていることを〈知っている〉のです。これが人生の基本的な智慧となつて下さる。それは、人生にとつて何が一番大事であり、何が真実であるかを知ることです」

N 「では、信忍とは」

D 「これは弥陀の本願を疑いなく信じている心、まさに信心のことです」

N 「弥陀の本願を信じるとは、どういうことですか」

D 「私のすべての罪と、死（死後）を引受け、浄土に生まれさせて仏にすべく、私に南無阿弥陀仏となつて喚びかけ

て、〈お前をまるまる引き受けてやる、助ける〉と喚んで下さっている南無阿弥陀仏の仰せを、〈こんな私のためでしたか〉と仰せのままに聞いている。あとも先もなく、単純に喜んでまますが、信じていることであり、疑い離れていくことです」

N 「そういう信心はどうして可能なのですか」

D 「それは、自分はずでに破綻した者であり、虚無（死）に転落するほか無い身と知らされれば、阿弥陀仏の大慈悲の仰せを聞いたなら、イヤもオウもない、ただ〈こんな者を〉と受けとらずにはおれなくな

ります。受けとらねばならぬとかどうしようかではない、受けとらずしては今が生きられないのです。もう一つ言えば、阿弥陀様の広大な慈悲の仰せにあきれて、私自身を阿弥陀仏に引き渡さずにはおれなくなるのです。すべては阿弥陀仏の本願のお力によって、本願を信じて起こるのです」

N 「そうすると広大な阿弥陀仏の慈悲を聞くことが大事ですね」

D 「ええそうです」

木村無相さんの法信(十)

昭和五十七年八月二十日(金) 武生駅前、林病院の待合室にて。半盲無相

さて、八月十日づけの紀さんのハガキの全文を書きましよう。

「八月五日付のお便り拝受いたしました。写真まで添えていただきなつかしく感じました。(ただ念佛)のお手紙有難うございました。」

『石川舜 台師が「疑い晴れて信ずるにあらず、晴れざるは凡夫の心なり」といわれたことを金子大栄先生が何度も仰せられていたとの事を聞きましたが、疑い晴れざる我が心メアテの本願とやらせていただき、念仏往生の誓いがまさにこの心(疑い晴れざる心)メアテにただ念佛するばかりで一切始末をつけてやるの信心。信じる力なく、疑い晴らす力なく、ここに私の心の一切否定の結集するところであります。信心に手も足もでない私、というところこそ、私の全面否定の(トドメの一点)であります。ただ念佛とはここに与えられる白道と知らされず。』

以上が、紀さんの八月十日づけのハガキの全文です。最後の『信心に手も足もでない私、というところこそ、私の全面否定の(トドメの一点)であります。ただ念佛とはここに与えられる白道と知らされず。』とあることについて、書けるだけ書かせ

てもらいます。

○ 紀さんは、

石川舜台師が「疑い晴れて信ずるにあらず、晴れざるは凡夫の心なり」という「疑いの意」「疑い晴れざる心」メアテが、念仏往生の本願と、このタヨリを誦むかぎり、思っているようですが、私は、弥陀の本願、念佛往生の本願は、ソモソモはじめは疑いの心、疑い晴れざる心をメアテの本願ではなかった。もつと、その底にモトがある、オメアテがある。といただいていることです。

○

この点、よく読み味わって下さい。お願い致します。

「疑いの心」とか「疑い晴れざる心」とかは、もつとアトから、出てきた心、といわねばならん。

かと、私は思うことです。それでは、疑い以前のオメアテの心とはなんでしょうか？

○ 如来法蔵比丘が、世自在王仏のみもと

で百一十億か、二百一十億かの諸仏の国を見せられて「念佛往生の誓願」をおこされた、ソモソモのハジメの時は、「疑いの心」も「疑い晴れない」という心も、無かったと考えてよいかと思えます。その時に目にとまったワレワレ衆生のスガタは『歎異抄』第一条でいただければ、

罪悪深重 煩惱熾盛

という「煩惱具足」のスガタであつて、ワレワレ衆生は、「煩惱具足」のゆえに久遠劫来、迷いに迷つて来て、その「煩惱」のゆえに、「苦惱」しているのに、その「苦惱」はナニユエにおこっているのかという「苦惱の根本原因」については、考えようもしないか、又、考える能力も全然ないのです。

それゆえに善導大師が二種深信の「機の深信」でハッキリおっしゃっていられるように「自身は現に罪悪生死の凡夫」であるのに、ワレワレ自身は、それを、そうとは知らないで、それによつての「苦惱」だけを感じていて、それが我が罪悪深重、煩惱熾盛のために「苦惱」しているとは、全然知らないのです。我ら凡夫はその「苦惱」の原因である「罪悪深重 煩惱熾盛」のゆえに「広劫よりこのかた、常に沈み、常に流転して」現在にいたり、今、現在「苦惱」しているのであり、そういう私が私である以上、未来永遠に、「出離の縁あること無く」苦惱をつづけるより、闇の生活をつづけるよりホカ無いのである。ところがワレワレ凡夫はそうした「煩惱具足、煩惱熾盛」のゆえに、久遠劫来、迷いに迷うて来て、今、現にそのために「苦惱」し、未来永遠に、出離の縁あることなし、苦惱無尽、果つることは無しである。

○

そういう凡愚、ワレワレが、それゆえにただ「苦惱」しているのを見るに見かねて如来法蔵様が、念佛往生の誓願をお建て下され念佛成仏、ただ念佛の救いの道をおつけ下されたのである。

○

ところがですよ、ところがですよ。如

来法蔵様が「煩惱具足、煩惱熾盛」のワレワレの「生死出離」の道をつけて下されたことについて、ワレワレまことに愚かな衆生は、その御苦勞の「念仏往生の誓願」を、「ウタガイ、信ぜぬ、ハカラウ」ということをするようになったのではありますまいか。

もとより如来法蔵さまは、「煩惱具足の迷いの衆生」は生死出離のために「念仏往生の誓願をお建て下され、ただ念佛の道をつけて下されても、「煩惱具足、煩惱熾盛」のゆえに、その「念佛往生の誓願」を、「念仏往生の唯一の出離道」も、ウタガイ、信ぜぬことも、お見抜きの上で、「念佛往生の誓願」をお建て下されたのであります。それゆえ「十八願」だけでなく「十九願」「二十願」もお誓い下されたのであります。

そうでありましようが、如来法蔵さまの念佛往生の誓願のおメアテは、やがては、その誓願もウタガイ、信じないことになる「煩惱具足」のわれらのために、お建て下された御本願であり、「煩惱具足」やがてはせつかくの「念佛往生の誓願」も、ウタガイ、信ぜぬことになる、まことに罪悪深重・煩惱熾盛のワレワレの、出離の唯一道として、念佛往生の本願をお建て下されたのであります。

○

それで、「念佛往生の誓願」のおメアテは結果的には、信じ得ず、ウタガイ晴れざる衆生のために、建立して下さったといたしまして、よいことでありましようが、ソモソモのはじめは、悪衆生、邪見やがては、不信どころではなく、全く自性としては、無信、無仏法のワレワレがためにお建て下された「念佛往生」「ただ念佛」の御誓いといただかれることです。